

「モノづくりは、人づくり」



1916年「1.5tエルー式アーク炉 日本最古の工業生産用アーク炉」

写真提供：大同特殊鋼株式会社 <写真説明文>表紙裏

◆内容◆

- 1 巻頭言 (株)デンソー副社長
中部品質管理協会副会長 土屋総二郎
- 2 我が社の改善・改革活動～山清工業(株)～
- 3 協会だより (QC検定対策セミナー新設!、品質コラム)



『全ての環境変化をチャンスと捉えて』

(株)デンソー 取締役副社長・中部品質管理協会副会長
土屋 総二郎

昨年は未曾有の被害をもたらした東日本大震災を通して、私共は日本人の絆というものを強く再認識致しました。

中部地区からの復興支援も非常に素晴らしく、この絆という言葉から昔の三河武士の結束力が思い起こされ、この中部地区は正に一致団結の強い文化が培われていると思に至りました。私共 中部品質管理協会としましても、この中部の文化に恥じないよう皆様との強い絆の元、中部地区全体が一丸となって昨今の経済環境変化も含めたダメージを跳ね返すことができるよう最良のサービスを提供していく所存であります。今こそ、現在の環境変化をチャンスと捉えて、TQMの精神に則り、『お客様第一』、『絶え間ない改善』、『全員参加』を通して、『仕事の質の向上』と『人・組織の活性化』を具現化し、モノづくり日本、モノづくり中部をより多く世界に発信していきたいと思っております。

私共デンソーにおきましても、リーマンショック以来、会社の体格・体質・体力を改革すべく、全社を挙げた構造改革を3年間実施して参りました。環境変化は私共の力を引き出す良いチャンスと捉え、『70%操業でも利益の出る体質への変革』、『次の成長に向けた新たな取り組みの開始』、という2点に総力を結集して活動をして参りました。

日本全体としましても、同様な各々の企業努力や企業間の結束によりまして、昨年の震災や洪水の影響はありましたものの、ほぼ計画通りの構造改革を推進できたのではないのでしょうか。

転じて2012年度からは、最近の大幅な市場ニーズの変化や経済社会の変化、地球規模の環境の変化等に対応すべく5年先、10年先に向けて、日本経済は新たなスタートを切ろうとしております。その中で、今後も日本企業の最も重要な競争力の源泉は品質であると考えます。昨今の多様化するお客様のニーズや社会の期待値に対しまして、また昨年11月に制定されました ISO26262(機能安全)等の新たな対応も含めまして、多様なお客様の使われ方まで踏み込んだ品質保証に変えていく必要があると考えております。また技術の急激な進歩によりまして、多くの安心・安全・快適・便利機能が可能になりましたが、個々システムの複雑さに関連し 品質保証のあり方も関連システム全体の視点が一層重要になって参りました。

一方 コスト競争の厳しい新興国で期待される品質レベルも急速に変化しておりまして、それらを見極め商品開発に反映していく必要があります。このような急激な環境変化にスピーディーに対応して、世界中のお客様に喜んで頂ける商品開発を進めることが求められてきております。やはりキーワードは急激な変化をチャンスと捉えて自分達を磨くということであると思っております。

皆様におかれましても、この急激な変化の多い環境に対しまして、全社一丸、グループ会社一丸、地域一丸となった指向性の高い活動を展開されてみえると思っておりますが、商品の高品質はもちろん、ここでこそ、その基盤そのものを高めるTQMの『お客様指向とそれを達成する為の徹底した方針管理』、それを支える元気溢れる『全員参加の小集団活動』が重要なキーワードになるものと信じております。

中部地区の結束力で攻勢に転じ、中部全体の更なる繁栄はもちろん、皆様の更なるご発展を心より祈念致します。

今月の表紙

大同特殊鋼の社室である「エルー式 1.5tアーク炉」。電極と原料の間にアーク放電を行い、炭素鋼や合金鋼を製造する電気炉で工業生産用として我が国で最初に使用されました。それまでの坩堝炉、酸性平炉と比較し大幅な生産性と品質を得る事ができました。

「日本の電力王」と呼ばれた創業者の福沢桃介が木曾川水系の豊かな水力から生まれた余剰電力を利用するため、設計者の名古屋電灯・顧問技師の寒川恒貞氏と構想を練ったと言われています。

本炉は米国金属協会(ASM)から「歴史的遺産」の認証を、2007年には経済産業省主催の「地域活性化に役立つ近代化産業遺産」の認定を頂き、我が国の電気製鋼の礎を築いた貴重な近代産業遺産である事を物語っています。

山清工業株式会社

1. 会社概要

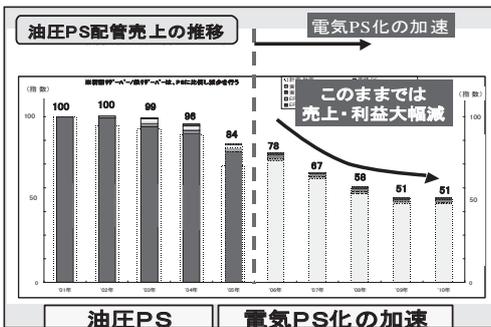
弊社は2010年度の売上は約90億円、山清グループの売上は6社からなり、単純合算で180億円の中小企業です。主な生産品は油圧パワーステアリングの配管を生産しております。

前身は商社ですが、生産管理、品質管理に力を入れるべく、物づくりの専門会社になろうと1984年工場部門を分離独立しました。

社是は、『健康であらゆる事故をなくしましょう』と少し変わっていますが、ここで言う健康とは、従業員、製品、会社のそれぞれの健康を言っております。

2. 2005年当時の活動

商材の変化としてパワーステアリング装置が、油圧から電気への切り替えの動きが加速し油圧PS配管の大幅な減少傾向が進む。

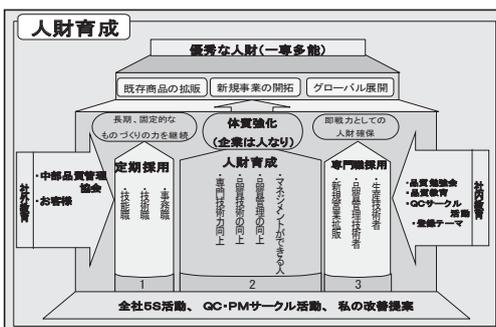


2006年以降、上の図の状況になるという事から大変な危機感を覚えました。しかしながらこの状況をチャンスとして捉え、乗り越える為に新しい商材にトライしてきたその内容をご説明します。

3. 2005年当時の状況分析と目標の設定

2005年当時生産していた自動車部品を加工技術別に層別し強み弱みでまとめました。

それを見て判断すると、すでに次への活動のベースはありましたが、それを実行、実現する為に『配管ユニット事業経営の確立から物づくり提案型企業へ』の目標を掲げ、人材の育成に地道に務めてまいりました。



4. 人材の育成による成果(事例)

その結果、中品協殿での受講で得た内容を活用し成果が上がった品質関係の事例を一部ご紹介いたします。

- (1) 差の検定活用 ... ①組付け治具の精度評価
- (2) 配置実験活用 ... ①ろう付けの量産条件の設定
- ... ②樹脂成形条件だしのための予備実験
- ... ③溶接の良品条件設定
- (3) 実験計画法(L18直交表)活用
- ... ①パイプの塑性加工の条件管理、

管理保証等を確立。

結果から見ますと、例えばシートベルト関係のパイプ部品の受注、又、電気PS関係の樹脂成形部品の受注と弊社にとってはレベルの高い製品が商品化でき、更に、売上減をカバーし且つ油圧配管に代る次の柱が見えてきました。

5. 体質強化活動

更に体質強化を継続的に行うため、1993年以来約20年間続けてきた泥臭いTPM活動にTQC活動をあわせ、減価低減、品質向上活動等に成果を出すべくエンドレスの活動を続けています。

6. グローバル展開と異業種への展開

以上の活動の成果として、アジアの3拠点にお客様のご要望に沿い合弁会社を設立し、それぞれ成果を上げております。又M/Aによる効果として、難削材の精密切削加工、人工骨の加工をすることにより医療の分野の部品加工に進出、成果を上げております。

更には、お客様の製品であります『半導体の製造装置』を組み立てる事からスタートし、今では量産設計、検査、据付まで実施できる成果が出てきました。

7. 活動の最大の成果

いずれにしても山清は中小企業です。発明発見ができる会社ではありません。人材、資金にも限界があります。今の製品が流れている現場を見て頂きQ,C,D,M,Sでスパイラルアップをはかり『うん。なるほどなあ』と、うなづいて頂ける現場を作り上げるという信念で活動を続けていきます。



1. 新設！QC検定受験対策講座＜3級・4級＞

2005年から始まったQC検定。年々受講者も増え、改めて、品質を中心とした経営・管理の再構築のために、受験を推奨する企業もふえています。このニーズにこたえ、当協会では、今年度より3級と4級の受験対策講座を新設しました。ぜひ、ふるってご参加下さい！

＜4級：平成24年5月31日(木)開催！！＞

初めてQCを学ぶ人向け。新入社員への品質知識教育にも適合します。

＜3級：平成24年7月30日(月)開催！！＞

問題解決、QC7つ道具、新QC7つ道具等、実務レベルで活用度の高い品質知識・スキル

2. 新事務所に移転しました！

3月26日～ 名古屋国際センタービル11階に移転しました。住所は発行元を参照下さい。

電話・FAX・メールは 変更ありません。今後は、こちらでセミナー開催をいたします。

今後も引き続き、ご愛顧宜しくお願いいたします！！

furuyaの品質SAIKOU

「ゆでガエル」の話をよく聞く。水を満たした鍋の中で、カエルが気持ちよく泳いでいる。その鍋を火にかけて徐々に温めていくと、カエルは水温の上昇に気づかず、ゆであがってしまうと言う。ところが、急に熱湯に放り込まれると飛び出すとも言われている。

緩やかな環境の変化に気づかないままに、大変なことになってしまった事例は枚挙にいとまがない。「チーズはどこへ消えた？」という本も懐かしい。「環境の変化に適應できたものだけが生き残る」と唱えたダーウィンの進化論はその本質を示している。

翻って会社の中はどうか。「ゆでガエル」状態になっていないか、気がかりなところだ。どうしたら回避できるのか、これが最大の問題となる。「いつもと違う(異常)」状態に、いち早く気付くことができるかが問われている。このためには「いつもの状態(正常)」を全員が正しく理解していなければならない。「標準」の重要性が強調される所以である。

一口に「標準」と言っても千差万別。法律や規則、社内の技術標準や作業要領書など紙に書いてあるものから、相手の顔色など五感によって判断されるものまで、いろいろである。共通点はいつもと同じなのか違うのか、この判断の拠り所となるものは全て「標準」であると解釈したい。「ばらつき」「変化」による「いつもと違う」状態に気付くかどうか、品質管理の出発点がここにある。

**【編集後記】 新しい事務所に移転し、4月から本格始動。国際センターはその名の通り、米
国領事館や外資系企業なども入っていますが、ビルの裏手は、名古屋市まち並み保存地区で
江戸の風情が残る四間道などもあり、新旧を味わえます。お越しをお待ちしています。**

(発行元)

中部品質管理協会

〒450-0001 名古屋市中村区那古野1丁目47-1 名古屋国際センタービル11階

TEL (052) 581-9841 FAX (052) 565-1205

<http://www.cjqca.com>